薫泉（くんせん）

学校の目標
社会の変化に自ら対応でき、豊かな心をもち、表現力豊かな国際人を目指し、次のような子どもを育成する。
・よく考え、進んで学習する子ども
・いつも元気で、じょうぶな子ども
・こころ豊かで、やさしい子ども

ホンモノに出会い学ぶこと

副校長　出口芳子

月日の過ぎるのは早いもので師走を迎えます。今年は、五月から新型コロナウイルスが「五類感染症」になり、制限なく教育活動を進めることができ、子どもたちが目を輝かせながら体験活動に取り組む姿や、友達と一緒に笑顔で交流を深める姿を見ることができました。保護者の皆様にはご理解とご協力をいただき、本当にありがとうございました。

また、十一月二十七日(月)の研究発表会では、矢口小学校の子どもたちが、「創造的な見方・考え方」を働かせながら、大田区の独自教科「おおたの未来づくり」の「ものづくり」（五年）や「地域の創生」（六年）、それにつながる創造的な素地づくりの学習（一～四年）に取り組む姿を公開しました。この教科では、子どもたちがなりたい姿をイメージして、より豊かにホンモノと関わり、課題解決に向けた疑問やひらめきをもち、ワクワクする気持ちで夢中に学び続けることができるように地域の方や企業との出会いを設定しています。

出会いの例として、元プロ野球選手・監督の故野村克也氏の野球観は、現役時代に同僚だった、助っ人外国人選手の元大リーガー、ドン・ブレイザー氏が日本に持ち込んだ「シンキングベースボール」に出会ったことで急速に深まったそうです。日本の野球が遅れていることを自覚し、メジャーの野球に強い興味を抱いていた野村監督にとって、ブレイザー氏の野球理論は目から鱗が落ちる思いだったそうです。「知将」として数々の実績を残した野村監督の代名詞とも言える「ＩＤ野球」は、ホンモノとの出会いにより創出されたのです。

教育活動で目指すのは自分たちで創り上げる、より深いホンモノとの出会いです。ホンモノと出会った時、どれだけ感動するのか、どれだけ心を動かされるのか、同じものと出会ったとしても、『出会い方』でその価値が変わってきます。子どもたちにとって、コロナ禍で思うようにできなかった、ホンモノとの出会いをより良いものにするために、ホンモノを探し求め、出会わせ方を考え、出会ったあとに、その感動やイメージとの違いなどを考えられるようにするために、教員も奮闘しました。

社会で求められる仲間とのコミュニケーション能力や自立心、主体性、協調性、挑戦する力、責任感、創造力、異なる他者と協働する能力等を育むためには、ホンモノに出会い、楽しみながらいろいろな世界の入口を見ることが必要だと感じます。これからの教育は、多くの人と関わる体験を積み重ねることにより、多様な解決方法を生み出さなくてはならない新時代を切り拓いていくために必要な資質・能力を育んでいかなければなりません。それは学校だけでなく、家庭での日常生活の中にも、子どもたちが疑問やひらめきをもつきっかけとなる貴重な出会いがあるかもしれません。

『地域清掃に取り組みました』

生活指導部

全校児童で地域清掃に取り組みました。地域の清掃をすることにより、地域の人々とつながりや関わりを感じるとともに、地域の一員であるという自覚をもつことをねらいとしています。また、地域の環境をよりよくしていこうとする気持ちを育てることも大切にしています。

清掃場所は学校の周辺や矢口の渡商店街、安方商店街、りんご公園などで行いました。子どもたちは、軍手をして、地域の人にすすんで挨拶をしながら、ゴミ拾いをし、学校で用務員と一緒に可燃ごみ・不燃ごみ・ペットボトルやカン・ガラスやビンに分けて、振り返りをして終了しました。

活動後の子どもたちの感想には、「すがすがしい気持ちになりました。」「街がきれいになって嬉しいです。」「地域の一員になれた気がしました。」という意見がありました。

『縄跳び活動に励んでいます』

体育行事委員会

縄跳びには、短縄と長縄の二種類があります。短縄は個人技能の向上を、長縄は団結力の向上を目的としています。

短縄の良さは、一人でもできる、スピースがいらない、全身運動である、道具が比較的安価で手に入れられるなど挙げれば多くの良さがあります。いろいろな技に挑戦しながら、多様な動きを身につけ技能の向上をしてほしいと願います。

長縄は、校内では八の字跳びと言われる、全員参加のチャレンジジャンプを行っています。個々に難しい技能は必要ありませんが、上達していくには、クラスのみんなと心を一つにしていかなければいけません。まずは、みんなが跳べるようになることを目標に、次に、全員で連続跳びができるようになることを目標に、そして、記録への挑戦を目標に、一つ一つ壁を乗り越えながら、団結力を高めていきます。